

□書 評□

「消化管内視鏡ハンドブック」

林 貴雄 日大講師・同板橋病院消化器科科長

日本消化管内視鏡学会
教育法設定委員会副委員長

京都大学助教授

三宅 健夫

わが国の消化管内視鏡学の学問的水準は質、量共に世界をリードしている現状であり、日本消化管内視鏡学会は既に創設以来満22年を迎え、会員数は4,600名に及ぶ大きな学会に成長した。近年、器種の改良、術式の多様化など逐年的に驚異的な進歩をとげ、往時の胃カメラの時代とは異なり、ますます専門的に細分化されてきている。従って現在用いられている全ての器種、術式に精通し、かつこれらをすべて駆使できる内視鏡医は最早や極めて少数であろう。

林博士は昭和36年、日本大学第3内科に入局され、以来18年間、消化管内視鏡学一筋に精進してこられた。国内はもちろん国際的にも数々の業績を挙げてこられたのであるが、消化管全域に限らず腹腔鏡に至るまですべての消化管内視鏡学に精通しておられ、上述したような極めて数少ない専門家のおひとりである。

林博士と小生とは以前よりシンポジウムなどで御一緒に親しくしていただいていたのであるが、昭和52年度第15回日本消化管内視鏡学会合同秋季大会を奈良市において小生が主催させていただいた折、パネルデ

ィスカッション「内視鏡検査の教育法」について林博士と共に司会を担当させていただいたことがあった。

内視鏡学会としては初めてこのテーマをとり上げたのであったが、この時以来内視鏡検査の卒後教育法の問題が注目を集めるようになった。

昨年秋の第16回消化管内視鏡学会秋季大会以来、正式に教育法設定委員会（委員長 常岡健二教授）が発足するに至り、本委員会内視鏡学会理事会の諮問委員会として認定医制度の設立に鋭意努力を続けている。もちろん林博士もその委員のおひとりである。

先に述べたように今や消化管内視鏡学の進歩は目ざましいものがある。諸外国の追及がきびしくなっている現在、これらに対応してゆくためには、内視鏡の普及を目指し、層の厚い内視鏡人口の増加をはかり、内視鏡学を更に発展せしめてゆかねばならない。そのためには後進の医師に正しい合理的な卒後教育を進める必要があり、基礎教育の見直しと土台作りが今後のわれわれの責務であろう。

内視鏡検査に関する教科書は数多

く出版されてきている。しかし簡便にして隈なくすべての消化管内視鏡に関する記述がなされているものは少ない。今回林博士の苦心の著書が出版された。一読して随所に盛られた詳細なゆきとどいた記述に一驚した。いわゆる技術の「コツ」というものは深い経験と幅広い知識がなければ書けるものではない。初心者にとっても教える側にとっても親切な著書である。

また随所に博士の手による図版やスケッチが掲載されている。コストを押えるための写真版省略のためと思われるが、これがかえって実に効果的である。「内視鏡像の読影力養成のためには先ずフィルムのスケッチより開始すること」というのが小生の持論であり、スケッチは診断医の主張を表現するものであるからである。本書のスケッチを見て林博士はまたペン画の大家でもあると感じさせられた。

ともあれ内視鏡検査の教育には常時携帯できる簡便にして要を得た広汎な内容のハンドブックが是非必要であると思っていたが、本書を読んでこれこそその目的にかなうものであると痛感した。また本書はパラメディカルスタッフにとっても必携の書であると思われる。本書が広く内視鏡検査に用いられ、次代を担うわが国の内視鏡医が絶えることなく輩出してゆくことを祈って筆を措く。

A5 頁218 図142 原色図29 1979
¥3,200 ㊦200 医学書院刊